

錆の国

錆
の
国

登場人物

カナリア ・ ・ ・ 錆の国の鍛冶屋

町の人たち

語り

1

語り登場。

語り 「ガラスのハート、と聞いて、皆さんはどんな言葉を想像しますか？

傷付きやすい。脆くて、儚い。壊れやすい。

その持ち主は多くの場合、繊細だとか、ナイーブだとか、デリケートだとか、そんな言葉で人格を表現されます。つまり、心が弱い、ということになるのでしょうか。

ちよっと、実物を見てみましょう。私の背中を押してもらってもいいですか？私もガラスのハートの持ち主なので、試しに出してみましょう」

語り、近くの観客に背中を押してもらう。

すると、語りの胸からガラスのハートが零れ落ちる、

語り 「観客にハートを見せる）見えますか？ 心が綺麗じゃないと見えないんですよ。

じゃあ、こうしましょう。（指でハートを作る）これが、私のハートです。

我ながら、なんとも儚げ。ガラスで出来ていますから、こんなにも薄い。確かに壊れやすそうです。ガラスのハートが傷付くと、ヒビが入ります。そのヒビから雫が溢れます。それが、涙。一つ入ったヒビはだんだんと全体に広がって、パリンとハートは割れてしまう。割れた破片はとても鋭くて、弱い自分をひどく傷付けます。痛くて苦しくて、涙はいつまでも止まらない。思わず。悲鳴をあげます。

だれか助けて。私を、助けて。この涙を誰か止めて」

語り 「とあるひとつの街のお話をします。その街に住む人たちはみんな、ガラスのハ

ートの持ち主でした。

いつもどこかで、些細なことで誰かが傷つき、涙が流れる。辛い気持ちにハ―

トは碎け、割れた破片は容赦なく、自分自身を傷付ける。たくさんの涙が毎日毎日街を濡らしていきます。

そのせいで街中、いたるところが赤茶色に染まる。その色の正体は、錆。

錆は、街のいろんなものに取り付いて、包丁はどれもこれも簡単に折れる。鍋の底は抜け、時計の針は先に進むのをやめてしまい、風見鶏は同じ方角を向いたまま、ピクリとも動きません。

弱い心は、街そのものもひどく脆く、壊れやすいものにしてしまいました。

けれど、この街には一人だけ、強い心の持ち主がいたんです。彼の名前はカナリアと言いました」

語り 「カナリアのハートは確かにガラスで出来ておりました。けれど、他の人と比べてとても分厚く頑丈です。傷一つない。とっても綺麗。
カナリアの仕事はこの街唯一の鍛冶屋さん。錆び付いて使い物にならなくなった、街中のの道具がカナリアの元に持ち込まれます」

食べ物屋の旦那さんが錆び付いた包丁を持ってくる。

旦那さん 「なあ、カナリア、この包丁を綺麗に直しちゃあくれないかい？ こんなんじやあ、野菜も肉も切れなくて、お客さんに出す料理を作ることかなわなない。そうになったら、そうしたらお店が続けられなくて、そうになったら家族を養うこともできなくなつて、路頭に迷うしなくなつてしまう。なあ、カナリア、仕事がいっぱいあるのはわかつてるんだ。でも、助けると思つて、お願いだ」

語り 「カナリアは元気な声で答えます」

カナリア 「大丈夫だよ。僕に任せて、新品よりもっと切れ味を良くしてみせるから」

カナリア、ハンマーを振るう仕草。

語り 「一つの仕事が片付かないうちにノックの音が聞こえます」

小さな子供が、壊れたおもちゃを持ってくる。

子供 「ねえカナリア、このおもちゃを直しておくれよ。歯車が錆び付いて動かなくなつちやつたんだ！」

語り 「カナリアは優しい顔をして答えます」

カナリア 「安心して。君の大事なものはちゃんと動くようになるから」

カナリア、ハンマーを振る動作。

語り 「毎日毎日、彼の仕事場からは鉄を叩く音が聞こえてきます。仕事が終わるのは、いつも明け方。なにせ、ひとつも嫌な顔をしないで仕事を全部引き受けてしまふのですから」

カナリア、大きなあくびをして、休もうとする。

語り 「眠りにつこうとしたところで、どんどんと、ノックの音が響きます。」

おじいさんが、錆た鍬を持ってくる。

老人 「ああ、カナリア、朝早くすまないね。これから畑に行くんだが、見てくれ、私

の鍬にまたこんなに錆が浮いてしまった。こんな道具じゃあ畑仕事がかどらない。無理にやってしまったら私は腰が悪いから、すぐにダメになってしまう。

そうになったら、寝込むしなくなつて、そうになったら、畑は荒れ放題になつて、猪や狐にせっかく育てた野菜が食い散らかされてしまう。そうになったら――」

語り 「カナリアはちつとも眠くないという様子で答えます」

カナリア 「僕に任せてくれればもう大丈夫。もっと立派に仕上げてみせるから！」

語り 「カナリアの元から戻ってきた道具は綺麗に錆が取れてキラキラと輝きます。それでも、残念なことに、街にあふれる涙は、カナリアの立派な仕事もすぐにダメにしてしまいます」

カナリア、大きなため息。

カナリア 「参ったなあ。ハートが傷つけば涙があふれる。涙が溢れば錆が浮く。錆を落としてきれいにしても、すぐに涙で錆だらけ。僕とおんなじようにみんなの心が分厚くて強かったらいいんだけど。そういうわけにもいかないし。

流れる涙をどうにかして止めたい。でも、どうしたもんかなあ」

語り 「カナリアは考えました。ガラスのハートが傷つかなくて、街の錆が綺麗さつぱ

りなくなつて、ちよつぱりだけ自分が眠れる方法。

三日三晩考えて、ついにカナリアはひとつの名案をひらめました」

カナリア 「そうだ！」

語り 「手にしたのは仕事で使っている真つ黒くて冷たい鉄の塊でした」

カナリア 「こいつをみんなのハートに打ち付けてやればいいんだ。そうしたら、とっても丈夫なハートになる。ヒビも入らない強い心になる。そうだ、鉄の心を手に入れるんだ！！」

語り 「さつそくカナリアは、仕事に取り掛かることにしました」

カナリア、ハンマーを振りかぶる。

語り 「思いの外、その仕事は大変なものでした。

真っ赤に溶けた熱い鉄でガラスのハートを包み、初めはそっと、だんだんと力を込めて強く強く、心を込めて強く、強く叩きます。丈夫な心になるように、涙が決して流れ出さないようにと、願いを込めて。

真っ赤に燃える鉄はカナリアの強い気持ちに応えるように、みんなのハートにしっかりと張り付いていきました。ガラスの輝きと相まって、それはそれは美しい赤く煌くハートが、出来上がりしました。

赤いハートはポカポカと熱を持ち、いつでも不安な悲しい気持ちを和らげていきました。涙は止まり、その代わりに頬は明るく、みんなの顔が笑顔になっていきました。

その素敵な顔を見て、カナリアは一層仕事に励みました。」

カナリア、ハンマーを目一杯振るう。

だんだんと力を失っていくカナリア。

語り 「休まず働きました。何日も、何日も。道具が持てなくなるほど、手は豆だらけ

です。体は鉛のように重く、びくりとも動かない。

眠くなってきました。瞼が、勝手に閉じていきます」

語り 「ありがとう、カナリア」

語り 「と、街の誰かの声がしました。たくさんの人がカナリアにありがとう、と口にしました。みんなの顔はとても優しく、暖かな色で包まれていました。涙の色でも、錆の色でもない、柔らかな赤い色」

カナリア、幸せそうな表情。

カナリア 「ああ、良かった。みんなの心は、強くなったんだ。ああ、良かった。みんなの笑顔が見れて、本当に、良かった」

語り 「その時、ハートにヒビはないのにカナリアの目から初めて涙がこぼれました。それからカナリアはゆっくりと目を閉じ、ぐっすりと眠りこけてしまいました」

カナリア、眠る。

語り

「カナリアが眠っている間、みんなは街の錆を落とすことにしました。ですが、仕事はなかなかうまくいきません。それもそのはず、今まで、街の錆を落としてくれていたのはカナリアたった一人だったのですから。」

でも、彼に頼むわけにはいきません。これまで街のために働いてくれたカナリアを思えば、彼を起こすわけにはいきません。

ありがとうカナリア。みんなは一丸となって街を綺麗にしていきました。慣れない仕事で腕がいたんでも足が苦しくても、決して涙を流すことなくよくよせず、一心不乱に働きました。なにせ、みんなの心は熱い熱い真っ赤な鉄の心なんです。

そうして、街の錆がすっかりなくなる頃、なんだか不思議な気持ち湧き上がってきました」

街の人

「ああ、街は綺麗になったなあ。とつても綺麗になった。でも、この街をきれいにしたのは、俺の力じゃなかったか？」

語り

「ずっと暖かった、鉄の心がだんだん冷たくなっていることに街の誰も気がつきませんでした」

街の人

「カナリアは何をしているのかしら？　こんなに一生懸命私たちが働いているのに、カナリアは何をしているの？」

語り

「冷えれば冷えるほど、鉄の心は暖かい赤色を失い、どんどん黒く染まってきました」

街の人

「そうさ、カナリアさえいればもっと仕事は簡単に片付いたんだ。偉そうに、何様のつもりだ？」

「決まってるさ、あいつは俺たちの心を強くして調子に乗っているんだ。だから、

いつまでも高いびきをかいてやがるんだ」

語り

「黒く染まった鉄の心はガラスの心よりもはるかに固く、そして、とても冷たくなっていました」

街の人

「なんでカナリアに感謝することがある？　カナリアがいなくなっちゃって、俺たちの心は強くなったさ。第一、あいつはまだガラスのハートのままだろう」

「そりゃそうだ。いくら丈夫だからって、あいつはガラスのハートの持ち主だ。

そんな弱い奴に、今まで世話になっていたかと思うと、虫酸が走るね。そうだ、

こうしよう。カナリアの道具を、俺たちのモノにするんだ、そうすれば、もう

あんな奴に用はないさ」

語り

「ぞろぞろと、みんながカナリアの家に集まりました。その目には涙はありません。その代わり、ひどく冷たく、ひどく鋭い光が宿っております。

何も知らないカナリアは激しいノックの音で目を覚ましました」

街の人、ノックの仕草。

飛び起きるカナリア。

カナリア「おや？ みんな、どうしたんだい？ こんなに集まって？ まさか、鉄の心にはならなかったのかい？ 僕の仕事はうまくいかなかったのかい？」

街の人「いや、カナリア、お前の仕事は大成功さ。みんな残らず強い心になったよ。そして、街の錆は残らず綺麗になった」

カナリア「そうなのかい？ それはよかった、本当に。あ、こうしちゃいられない。僕に手伝えることはないかな？ みんなの道具、壊れているものはないかい？ 僕がすぐにでも――」

街の人「いや、それには及ばないよ、カナリア。その代わりに、お前の道具を俺たちに寄越しておくれ。ハンマーも、鞆も、やつとも、何もかも。ああ、それとね、そのたぐさんの鉄。それもだ」

カナリア「え？ なんだだい？ 鍛冶仕事なら僕がやるよ？ 今までずっとそうしてきただろう？ みんなの心を強くしたのだって――」

街の人「やっぱりそうだ！ やっぱりお前は調子に乗っているんだなあ。なあ、カナリア、お前は俺たちの心を強くして気分がいいんだろう？ 自分のお陰でと思っているんだろう？ 自分がいなければ俺たちは強くなれなかったと、上から見ているんだろう？ 冗談じゃない！ 所詮ガラスのハートのお前が偉そうな事を言うな！」

カナリア「え？ 何を言っているの？ みんな、なんでそんなに怖い顔をしているの？」

街の人「もう、お前の力は借りないよ、カナリア。お前みたいな弱い奴はこの街にはいないんだ。どんなに分厚くたって、お前の心はガラスだろう？・・・ほうら、みんな見てみろよ、カナリアが泣いているよ」

カナリア、自分の目に手を当てる。

語り「涙が溢れていました。ぴしりとぴしりと、ひび割れる音が聞こえます」

街の人「おい、近づくんじゃないよ？ せつかくの鉄の心が錆び付いちゃあかなわないからな。はははは」

語り「嫌な笑い声が、響きました。みんなが笑っていました。カナリアのことを見て、笑っていました。でも、その笑顔はちっとも優しくなんかありませんでした。ぴしりぴしりと、ひび割れる音が聞こえます。何の音なんだか、カナリアにはわかりませんでした」

街の人「さあ、運び出させてもらうよ。カナリア。街のみんなの頼みだ、お前は、なん

でも笑顔で答えてくれたなあ。いいよな？ 持って行っても？」

語り 「カナリアは笑顔で答えました」

カナリア 「ああ、いいよ。僕はもう、何もすることがないんだろう？ 持って行つて。みんなの役に立つなら、それが一番いい」

街の人 「ありがとう、カナリア」

語り 「いっさいがっさい、街の人たちは持つて行つてしまいました。仕事場はがらんとして、なんにも残つていません。カナリアは呆然と立ち尽くしておりました」

カナリア、周りを見回す。

語り 「カナリアのハートは確かにガラスで出来ておりました。けれど、もう自分の心を鉄の心にはできません。そもそも、この街には彼しか鍛冶屋がいないのですから、街の誰も彼に鉄を打ち付けることなんかできません。そもそも、鉄の心になった街の人たちはカナリアのことが嫌いになつてしまったのですから、誰もカナリアを助けようとはしません。ガラスはどんなに頑張つても、鉄にはかえません。パリンと、何かが碎ける音がしました」

カナリア、大きな声で涙を流す。

終